

星野 泉 明治大学政治経済学部教授

*

千代田区が本年度第37回東京国際映画祭の開催に先駆け、区内施設で千代田区・第37回東京国際映画祭共催企画「千代田シネマセレクション」として、過去に同映画祭で上映された作品の上映会を実施した。

そこで上映された、フランスのアニメ『リングはチキンが食べたい!』（2023）は、日本で製作されたものとは少し絵柄の異なるアニメである。亡き父親の思い出の味パプリカチキンを食べたいという娘の願いを実現するため、母親が鶏肉を買いに車で出かける。あいにく、街は公共交通機関を含むゼネラルストライキで、お肉屋さんまで閉まっており、鶏肉を求めて右往左往。しまいには養鶏場の鶏を盗んではみたものの、運転中ながらスマホでも警察に追われてしまう。おまけに、生きた鶏をどう絞めたらいいのかもわからない、すったもんだのドタバタコメディ。

*

昭和の時代、日本でも、公共交通機関のゼネストはあった記憶があるが、フランスでゼネストとは、多くの業種にまたがる本当のゼネラルもあると知った次第。スウェーデンでは、共感ストライキというものもあり、昨年12月には、スウェーデンの整備士らがテスラに

ほしの いずみ

立教大学大学院博士後期課程研究指導修了。経済学修士。明治大学政治経済学部助教授を経て、1997年から明治大学政治経済学部教授。専攻は財政学、地方財政論。

著書に『財政のかたちは国のかたち—財政再建のための30のポイント—』（朝陽会、2022年）、『自治体財政を読みとく』（イマジン出版、2022年、共著）、『スウェーデン高い税金と豊かな生活』（イマジン出版、2008年）など。

対し、賃金その他の条件をカバーする労働協約の締結を求めたが同社は拒否。ストに入った整備士らに共感して、港湾労働者、運転手、電気技師、清掃業者、郵便労働者、運送業労働者組合などもストに参加し、一部年金基金もテスラ批判に加わっている。

シングルマザーの困難と格差社会、労働組合など社会性のあるコンセプトをもつ大人向きのアニメであったが、確かに街には人がいて、そこには大人や子供もいて労働者の権利としてのデモやストライキがあって、困難を乗り越えるための対話があって…。現在ではあまりみられない、昭和の風景がみられた。

*

日本でも、40年ほど前まで、労働組合が確かに賃上げや労働条件の引き上げに向けストを実施していたし、政治も、いわゆる55年体制の中で、自民党、社会党の1.5大政党制などと揶揄されながらも対立ばかりでない議論があった。大企業を中心に福利厚生があり、中曽根政権では、配偶者控除とともに配偶者特別控除の併給、公的年金控除導入、退職金課税の軽減、相続税減税など、社会保障より家族保障を助けるための減税などが進められた。コミュニティがあって、家族、親族があって、旧大蔵省の資料にあった「夫婦子供二人の標準世帯」が確かに存

在していた。

*

さて、令和の時代は。夫婦子供二人の標準世帯は幻想、おひとりさまが標準となって、コミュニティ、親族、家族内の互助、さらに企業内福祉、福利厚生への期待も可能性の一つになってしまった。一番身近な基礎自治体も、平成の大合併で半分近くにまで減少し、公務員も激減。自治体はいやおうなくプラットフォームになってしまった。人口減少も進む。政党、地域、働く者、消費者、ネットでも、議論というよりは対立、分断が進みつつある。

今、必要とされるのは議論である。ただ、正しい知識がなければいくら議論してもよい結果にはつながらないし、相手への尊敬がなければそもそも議論は成り立たない。地域では、かつて存在した団体や組織が消えつつある中で、ボランティア的な地域住民、NPO、地域産業への期待がますます大きくなりつつある。地域の底力が試されている。■